

Language Endangerment in Middle America

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 八杉, 佳穂 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001914

中米の危機言語の現状と問題点 マヤ諸語を中心に

八杉 佳穂

- | | |
|------------|----------------|
| 1 中米諸語 | 3 諸記法の問題 |
| 2 記録のための記述 | 4 記述の方法を得て何をする |

1 中米諸語

中米には、表1に見られるように、100あまりの言語が話されている (Yasugi 1995)。一説によると、征服当時は約350の言語があったという (McQuown 1955)。この数には方言が含まれているし、名前だけで実体のない (記録のない) 言語もあり、確かな数を得ることはむずかしいが、この500年の間に、かなりの言語が消滅したことはまちがいない (Garza Cuarón and Lastra: 1991)。ヨーロッパ人と接触直前の人口は2300万 (2700万から5000万という意見もある) と推定されており (Denevan 1992: xxi-xxiii, Thornton 1987)、16世紀の征服戦争や強制労働、疫病などにより、その90%が失われたという。これほどまでの民族破壊が人類史でほかにあったとは考えられないほどの壊滅的な減少である。17世紀後半から回復してきたとはいえ、現在は1000万ほどである。混血 (メステイソ) の度合いが増加していることを考えると、征服時の人口に達することはもはや望みようもない。

中米には、表1の人口からわかるように、ひじょうに危機的な言語から、勢力を伸ばしている言語まで、いろいろな状態の言語がみられる。表の右端の話者数は、メキシコの場合は、1970年、1980年、1990年の国勢調査の数である。これは5歳以上の数であり、5歳未満の数を加えると、20%から40%ほどふえる。ローマ数字でXIと分類してあるマヤ諸語のうち、グアテマラにある言語の話者数は、1980年と1990年の国勢調査に基づく話者の数と推計である。政府統計では430万ほどであるが、マヤ学者の推計では600万を超える (Tzian 1994; Proyecto Q'anil 1999; ILV: 1982; Cholsamaj 1996)。

表1からわかるように、中米の言語は、新大陸の中では、ひじょうに人口が多い。大きな言語グループとしては、北の方から南にむかって、ユートアステカ語族、オトマンゲ語族、マヤ語族が挙げられる。ユートアステカ語族とオトマンゲ語族は約100万の話者を擁する。マヤ語族は600万以上である。これらは18から30の言語からなる。それらの大きな語族の間に、小さな語族、それから系統関係のわからない言語がたくさんあ

り、全体で100ほどの言語がある。その中にはもう言語は滅びて、ただ名前だけ残っているだけ、すなわち、自分たちはオパタだとか、チコムセルテコと言うけども、それらの言語を失っている人々や、すでに言語も話者も自己認識も失われているものもある。また話者がひじょうに少ないため、今まさに滅びようとしているラカンドン語やイツァ語、チョチョ語などもある。逆にキチェ語などのように100万を超し、勢力を保ち、さらには拡大を続けている言語もある。しかしながらそのような言語にしても、スペイン語の圧倒的な優勢により、第一言語をスペイン語にする傾向がとみに増しており、話者人口が多く、一見消滅の危機がないようにみえる言語でさえ、たいへん危ない状態にあると見て差し支えない。ふつう親の世代はつかうが、子供の世代はつかわない（親の言うことはわかるが話せない）といった状態を経て、言語は失われていく。その状態がすでに多くの「大言語」においても見られるのである。ところが、サルバドルにあったカカオペラ語やレンカ語のように、政府軍による話者の虐殺や、殺されたり虐待を受けたりしないように自分たちの母語を話すのをやめたために、突然消滅にちかい状態に陥った例もみられる（Campbell and Muntzel 1989: 183）。いくつか例を挙げたことからわかるように、いろいろな状況が、中米という地域にみられると言っても過言ではない。

表1にあげた言語は、何らかの記述がある。一つの言語、もしくは方言がある場合は、少なくとも一つの方言の音韻についての記述はある。研究が活発な言語では、方言ごとに辞書とか文法書がある。危機的な言語の場合で、ほとんどもう話者がいない場合でも、数十から数百の単語が記録されており、その音韻的な分析もある。簡単なフレーズなども記録されている場合がほとんどである。もっとも、アルファベットによる記録の残る16世紀以降から考えると、名前だけしか記録に残っていないものもあるが、現存の言語で全く記録がないということはない。まったく記録のない地域に比べれば、中米の言語の記述は豊かといえようが、詳しい文法記述や辞書などがあるかどうかを問題にすると、まだまだ記録は整備されているとはいえないし、また方言の違いなどを考慮に入れると、まだまだ足りないのが現状である。

2 記録のための記述

中米はひじょうに高い文明の栄えたところである。マヤ文字やサポテカ文字、アステカ文字など、文字をもっていた地域である。それゆえ自分たちの言語を独自の文字で書き表わしていた。しかしスペイン人征服時には、そのほとんどが消えており、わずかに、アステカ文字とミシュテカ文字が使われていたにすぎない。これらの文字は、おもに地名と人名表記に用いられ、言語を完全に表わすにはほど遠い文字体系であった。ま

たアルファベットに比べて効率が悪かったためか、そうした文字伝統も、スペイン人との接触で消えていき、アルファベットに取って代わった。断片的な知識が17世紀まで伝えられていたが、それも忘れ去られた。

征服後まもなく、ユカテコ語、キチェ語、カクチケル語、ナワトル語、ミシュテコ語、サポテコ語などがアルファベットで記述され始めた。記述の方法は、ラテン文法に基づいているが、スペイン語の最初の文法書であるネブリハの影響を受けたと考えられるものもある。フランシスコ会やドミニコ会の伝道師たちがおもに書記法を教えたのであるが、修道会の違いや言語の違いにより、書記法はかなり異なっている。たとえば、もっとも資料の豊富なナワトル語の場合、カ行はスペイン語式に、ca, que, qui, co, cu であるが、ユカテコマヤ語の場合は、ca, ce, ci, co, cu とラテン語式である。またスペイン語にない音がインディヘナの言語にはよくみられるのであるが、そうした場合、言語ごとにいろいろな工夫のあとがみられる。たとえば、マヤ諸語には声門閉鎖音列があるが、ユカテコ語の /p'//t'//tʰ//ch'//k'/ のうち、/p'/ は pp、/t'/ は th、/ch'/ は chh のように、文字の組み合わせによって表わした。軟口蓋音の場合は、/k/ を c で表わし、/k'/ を k で表わした。しかし pp の代わりに p を用いたり、h の代わりに h を用いて th とか、chh として声門閉鎖を際立たせる場合もあった。/tʰ// の場合は、既存の文字ではなく、o で表わした (八杉 1985)。このように、スペイン語にない音を表わすために、既存のアルファベットを組み合わせたり、ちょっとした工夫を文字に加えて、表わすことにしたのであるが、o のように、c を逆にした新しい文字を作り出して表わすことも試みられた。キチェ語やカクチケル語では、/q'//k'//ch'//tʰ// というスペイン語にない声門閉鎖音を表わすために、3 または e、4 または q、4h または qh、4、または q のように、アルファベットの体系にない文字を使って表わした。このようにスペイン語にない音に出くわした修道会士たちはさまざまな工夫をして書記法を考えたのである。

こうして工夫して作り上げた書記法を用いて、神話や伝説などの口承文芸や、土地文書、懇願書、遺言などをインディヘナの人々は書き残した。一方修道会士らもインディヘナから聞き出した物語や、彼らを使って調べて文法書や辞書などを記した。また教理問答集などキリスト教関係の書物も書き残している。

グアテマラでは、首都の言語としてカクチケル語が大学で教えられた。カクチケル語の教授がいたのである。大学での言語講座は1678年から独立時 (1822) まで続いたという (Brinton 1884)。このように、16世紀から18世紀にかけて、インディヘナの諸言語は、研究され、記録され、また教えられてきたのであるが、しかし19世紀になると、インディヘナの言語はほとんど関心を引くことはなくなった。そして書記法も忘れられていった。

20世紀にはいると、しばらく関心の外にあったインディヘナ言語の記述が盛んになり

始めた。言語の記述、研究は、それ以来アメリカ合衆国が中心であるが、現地の学者たちによっても行われている。注1に、メキシコ、グアテマラ、ニカラグア、コスタリカの主だった調査機関を挙げておいた。この中で一番今活発なのは、グアテマラである。グアテマラの場合は、60年代からゲリラと政府軍の争いが続いていたが、1997年に歴史的な和解が成り立って、ひじょうに先住民の意識が高まってきている。この人たちは、マヤの人々であるが、忘れ去られていた古代マヤ文明という大文明を、自分たちの先祖のものと教育することで、自分たちが虐げられた惨めな存在から、誇り高き人々と意識できるようになったということも、かなり影響がある。

グアテマラでは、「フランシスコ・マロキンの言語プロジェクト」が、アメリカ人の言語学者を中心にして、70年代に書き方を決めて、それをもとに、言語研究が盛んになった。インフォーマントとして雇ったかなりの数の現地人が書記法を学び、その人たちが言語学者として育ってきた。他に、グアテマラの夏期言語学研究所 (Instituto Lingüístico de Verano) とカラファエル・ランディバル大学、マリアノ・ガルベス大学で言語教育が行われて、インディヘナ言語が教えられている。そうした教育のお陰で、言語の教授が生まれてきている。また「マヤ言語アカデミー (Academia de Lenguas Mayas)」という機関が、1987年に生まれ、1991年に国で是認された。政府の1機関ながら、所長はじめすべてマヤ人で運営されている。各言語グループの主となる町にその支部ができ、そこで言語教育や普及活動が活発に行われている。そうしたいくつかの機関があって、それらの成果が1990年ころから、出てくるようになって、言語の記述資料がふえるとともに、言語についての問題意識がひじょうに高くなってきている。

それに対して他の国は、グアテマラに比べれば不活発である。その理由は、グアテマラという国は、半数あまりが先住民の人々であるのに対して、メキシコでは7%ほど、ニカラグア、コスタリカでは、ほんとに少数の人々しかいないことが挙げられる。特にグアテマラでは80年代前半特にひどかった弾圧政策に対する民族覚醒運動という面も見逃せない。その国におけるインディヘナの政治に与える圧力が、全然違っている。

現在、調査はほとんどの場合は大学とか研究所が中心になってやっているが、1言語に1人の研究者しかいないのがふつうである。最近は、効率を上げるため、修士とか博士課程を終えた人や研究者が1カ所に集まって、インフォーマントを集めてきて一斉に調査をするということをおこなっているプロジェクトが注目を浴びている (ホームページ (<http://www.albany.edu/anthro/maldep>))。ニューヨーク州立大学のジャスティソンとピッツバーグ大学のカウフマンが中心になっておこなっている「メソアメリカの言語の記述プロジェクト (Project for the Documentation of the Languages of Mesoamerica)」である (Kaufman 2001)。もっともこれも1言語について1人の研究者が割り当てられており、ひとつの言語を何人かで研究するものではないが、言語資料の集成に効果を上

げている。

3 書記法の問題

中米の場合は、言語を記述する場合、書記法ということが問題になる。16世紀にスペイン人が征服する以前に、文字を彼らは持っていたが、16世紀に消えて、アルファベットに置き換わった。それで、その当時の大言語であるユカテコ語とかキチェ語とかナワトル語などの記述が確立して、文法書や辞書、物語などが書き残された。ところが19世紀にそれらはほとんど忘れられてしまう。自分たちで作った文字を持っていて、それが一度忘れられて、16世紀になって、新しい書記法、すなわちアルファベットで記されるようになるものの、それもまた忘れられたわけである。20世紀に入って、記述言語学の対象として、アメリカの言語学者であるパイクとかナイダなどにより、いろいろな中米の言語が利用されて、記述言語学を深める役目も果たしてきた。

夏期言語学研究所は、メキシコでは1935年、グアテマラでは1952年に設立された。その書記法というのは、スペイン語が書けるように、スペイン語に近い書き方を取った。彼らはその正書法をつかって膨大な資料を生み出したが、その資料が中米の言語研究に果たした役割はひじょうに大きい。しかしその書記法は80年代にスペイン同化主義とみなされ、批判されることになった。グアテマラでは、政治的な問題から、その書記法をやめようということになり、1987年に新しい書記法が制定された。これは、1976年にカフマンが、フランシスコ・マロキン言語研究所から出したものに基づいており、1987年に法律で定められた。そのため、この正書法でもって書かないと、法律違反ということになるわけである。これは、自分たちの言語を、新しい記述法でもって、自分たちの手で記述するという、ひじょうに政治的な目的にもなっており、それによって、マヤ人自身も、民族的に高揚した時代を迎えることになった。辞書とか文法書はいうに及ばず、あらゆる出版物が、その正書法に則って書かれるようになっていく。その正書法がマヤ民族意識を生む大きな役割を果たしたことは間違いないが、その書き方が、特に外国の研究者に必要以上に尊重されており、彼らによって、グアテマラを超えて、メキシコにあるマヤ諸語にまで使われるようになってきている。メキシコではそのような正書法は承認されていないので、これまで行われてきた正書法を無視する形で用いられているといつてよい。またマヤ文字解読のための言語記述にも用いられている。必要以上に伝統的な正書法を新しい書記法に改めることになっており、ひじょうに横暴な権力と化した感すらある。

そこでその正書法を挙げておきたい。同じマヤ民族でありながら、メキシコのユカタンマヤ人が用いている書き方の代表例をあわせて記すことにする。

グアテマラの新しい正書法 (1987年)										Cordemex ユカテコ語辞典(1980年)				
p	t	tz	tch	ch	tx	k	ky	q		p	t	ts	ch	k
p'	t'	tz'	tch'	ch'	tx'	k'	ky'	q'		p'	t'	ts'	ch'	k'
b'	d'									b				
	s		sh	xh	x		j	h			s		x	h
m	n				nh					m	n			
	l	r									l			
w				y						w			y	
ie a ou ii ee aa oo uu ië ä ö ü										ie a ou ii ee aa oo uu				

この正書法には、いくつかの問題がある。たとえば、そり舌と非そり舌の摩擦音がある言語とそり舌の摩擦音がない言語がある。区別のある言語では、xhとxの文字を非そり舌とそり舌の音に当てている。区別のない言語、すなわち非そり舌音しかない言語では、xを非そり舌の摩擦音に使っている。つまり、言語により、xが非そり舌の音を表わしたり、そり舌の音を表わすことになる。比較言語学的には、区別のある言語でのそり舌音が、区別のない言語でのxにあたるので、そういう正書法を採用したのであるが、区別のある言語とない言語の両方を扱う場合、たとえば比較言語学的な研究を行なう場合、混乱をきたす。

また人名や地名はいまだに改められず、旧来のスペイン語式をつづり方が踏襲されている。たとえば地名のAguacatanはAwakateko語のもととなった地名であるが、地名としてはそのままである。言語名は1980年代まで書いていたAguacateco語とは書かず、Awakatekoと書くようになっていく。個人名の場合は、登録などを考えると、もっと深刻である。

ユカテコ語を表わすコルデメックスの方式にも問題がある。tsとts'は伝統的にtz、tz'(または19世紀後半以降dz)と書かれてきた。それを採用する方がたとえば、satsahのような場合、satzah [サツァフ]ではなく、sat-sahということがはっきりする(八杉1985: 105)。

こういうのを見ると、「言語を記述するのはアルファベットだけしかないのか」という疑問が起こる。マヤ文字は、漢字仮名交じりのわれわれの書記法とよく似た体系の文字である。仮名にあたる音節文字が存在する。表2に音節表を挙げた。まだ埋まっていないところや、間違っただけのものもあるが、いずれ訂正され、音節表の全部が埋まるだろう。このような文字を用いて、言語を記述することもあり得る。実際、書名や人名などに用いられている(図1, 2, 3)。もっともこれでもって言語を表わすとすると大変であり、効率の悪いことは明らかである。しかしマヤ人たちは、機会のあるごとに、この

ような文字を使おうとしている。

世界の言語を、二十数個のアルファベットで記述するということが自体問題である。すべての言語をアルファベットで書く必要などない。一つの例として、古代マヤ文字をうまく利用した書き方が、もしかして民族的な意識の高まりとともに、採用されるかもしれない。今のままでは複雑すぎてとても実用的ではないが、もっと簡単にして、日本の仮名のような書き方になる可能性がないとも限らない。せいぜい本の題名や自分の名前などに使われるだけにとどまるであろうが、書記法というものをもう一度考えてみる問題提起となろう。

4 記述の方法を得て何をする

現在グアテマラでは、それぞれの言語の読み書きができる人が最低3人はいる。その人たちの多くは「マヤ言語アカデミー」に属して、言語研究ばかりでなく、識字教育に携わっている。また政府機関（DIGEBI = Dirección General de Educación Bilingüe Intercultural）によっても二言語教育が試みられている。その際どのような問題があり、将来、どのようになるであろうか。危機的な言語に限らず、言語を記述する時に、どういふふうにするかということについては、大変問題が多い。結局は読み書きを学習する以外方法はないのであるが、その時に、スペイン語とどういふふうに関係させるのかということが、絶えず問題になる。いくつかの基準があると思うが、ここでは、利便性、経済性、統一性、創造性、永続性という五つの点から考えてみたい。

①利便性 一体記述方法を学んで、何になるのか。中米の支配言語は、スペイン語であって、その下にインディヘナの言語がたくさんある。インディヘナの人たちに、いま、自分たちの言葉を自分たちの手で書いて、何かを表わすことができるように、書き方が教えられている。確かに自分たちの言語を書き表わしたいという気持ちは十分すぎるほど理解できる。しかしそれが一体何の役に立つのだろうか。メキシコやグアテマラなど、スペイン語が公用語となっている国で、スペイン語の読み書きを知っていることは大切である。国民としての権利である。それを知らないとさまざまな点で不利である。しかしインディヘナの言語の読み書きを知って何の得があるかと問われるなら、ほとんどないと答えざるを得ない。もちろん知っていれば『チラムバラムの書』が読めたり、『ポボルウーフ』が読めたりといいことはある。しかしそれらの古典が読めなくても暮らせる。しかしスペイン語の読み書きを知らないと、いろいろなところで支障をきたす。だまされたり、不利益をこうむった話はノーベル平和賞をもらったリゴベルタ・メンチュウも述べている（リゴベルタ・メンチュウ 1987）。

②経済性 書記法を教える時、経済性というものがひじょうに問題になってくる。スペイン語という支配言語があつて、そこにもう一つの言語で教える必要がある。そのためたとえば、義務教育で教えるとき、単純に計算すると、倍の時間がかかるわけであるから、今までのカリキュラムであると、半分しか教えられないことになる。そこで小学校では最初の2年で母語の書き方だけを教える。一応のルールさえわかれば、後は彼らに任しておけば、自分の言語であるから書けるであろう。残りはスペイン語で教育する。実際メキシコではそのような原則で教育が行われている。しかしインディヘナの子どもたちが、自分たちの言葉を自由に書けるようになるかといえば、そうではない。2000年の調査で、 Chol 語を話す村の学校を訪れたとき、識字教育の効果を確かめるために、5年生に手紙を自分たちの言語で書いてくれと頼んだことがある。一応書き方を習っているはずであるが、全然できなかった。自分たちの母語 Chol 語で手紙を書くことがあるとは考えてもみなかったようである。子供たちは、書くこととはスペイン語で行なうものであるという「常識」に染まっていた。もちろん効果的な学習をすれば可能であるかもしれないが、小学1、2年でいくら教えてもそれは無理というものではなからうか。こういう原則で言語は書けるという基礎ができておればそれでいいのであろうか。

言語というものをもちろん利便性や経済性で片づけようという気はさらさらしない。グアテマラの言語を調査しているとき、時計の行商人に出会ったことがある。彼はエバンヘリコ（新教の一派）であり、夏期言語学研究所がこしらえたマム語の聖書を読みたい一心で、書き方を独学して、何度も繰り返し聖書を読んでいた。その聖書は、旧来のスペイン語に近い表記法で書かれており、現在ではその表記法は否定され、新しい正書法に変わっているが、そうしたことは問題ない。どんな書き方であってもよい。ひとえに学ぶ価値を見いだすかどうかである。母語を話すことを続け、読み書きを学ぶことは、経済性や利便性などをこえた情熱を母語に持ちうるかどうかにかかっている。しかし残念ながら、彼が持ち得た情熱は、ふつうでは起こらない。母語が危機に瀕したときになってはじめてその価値に気づくのである。

③統一性 言語はふつういくつかの方言に分かれる。そのどれをもってその言語の正書法とするかは、大きな問題である。一つの方言を代表とすると、他の言語の使用者には大変反発を招く。たとえばカクチケル語を取ってみよう。数え方にもよるが、12ほどの方言に分けられる（Kaufman 1976）。そのうちの一つの言語を代表してやってみようという、今度は、どうして自分たちの言葉が採用されないのかといったことで、民族間の紛争が起こってくる。結局、お互いに違う村の人と話をするには、スペイン語以外にはない。それを認めると、今度は、民族運動として成り立たないという、ジレンマが存在する。

われわれは正書法を学ぶ。それが当たり前のように思っている。それは威信言語である。それは学ばなければならない規範である。書き方のきまりがすでにある。それを学ばなければならない。ところがグアテマラでは、興味深いことに、その反対のことが起こっている。正書法以前に、各方言の書き方がある。つまり、外国の研究者が言語の研究のために、ある方言を研究する。その際に何らかの方法で書く。そうしたものがある。通常は国際音声字母か、フランススコ・マロキン方式である。正書法を決めるためには、そのうちのある方言を選ばなければならない。それを標準化しなければ、それぞれの方言でそれぞれの書き方があることになる。選んだ方言の書き方は、発音通りが原則である。ここに大きな問題が生じてくる。それぞれの方言で発音通りの書き方を推し進める。すると発音が異なれば、異なる書き方になってしまっていて、正書法に必要な標準化が難しくなる。たとえば、キチェ語であると、トトニカパン方言では、6母音であるが、その他の方言では5短母音5長母音である。トトニカパン方言がまねをしたい威信言語であれば問題はなかるうが、それぞれが独立していて、威信言語にはなりようがない状況の下では、トトニカパン方言をキチェ語の正書法に採用すると、その他の言語はうまく書けないという不満が生ずることになる。規範づくりの例がすでにある。たとえば、その基準に、

1. 同じ概念を表わす言葉が場所により異なるとき、すべて同意語としてみて、それが使われない場所で、そのように教える。
2. 同じ言葉で変異があるとき、より情報がある形を選ぶこと。大多数の人が容易に理解できること。より完全でより基本的な形であること。よりオリジナルで古い形を残していること。たとえば「彼に」という意味で che, chre, chire という形があると、chire という形を採用する。
3. 俗用を避ける。一つの場所でしか使われていない形は避ける。
4. 言語間で共通の形があれば、それを採用する。たとえばポコマム語の声門化した w または m は他の言語では b' にあたるので、w' とか m' とか書かず、b' と書く。
5. 標準形には、言語に存在する表現のすべての可能性を含むこと。

[England 1996: 187]

こうしたいくつかの基準を設けて、互いの異同を整理して、書き方を定めることが行われている。

言語政策を決めている人々は、母語を記述することを苦勞して学んだ人々である。その人々が方言の違いを超えて、新しい正書法を生み出す努力をしている。しかし強制がなければ正書法は成り立たないものである。威信ある言語として、どこかひとつの方言

が採用される必要がある。それをもとに全体が包含されるように徐々に変えていくというのが、民主的な方法であろう。しかしそうすると、すでにある記述はやめなければならない。トトニカパン方言のように母音が六つの方言が10母音の書き方を採用する日が来るのであろうか。方言をそのまま生かすと一つの正書法でくくることはできない。

すでに方言ごとの書き方がある言語の統一的な正書法が可能であろうか。方言同士を比較して、言語学的にその一つを選ぶことは不可能である。学問的に民主的な解決法はたいへん難しい。習得のほとんど決定的な条件は、「より多く」である。新聞や雑誌などにより、より多くその書記法が眼に触れれば、人はそれに慣れる。多数決という意味では民主的といえるかもしれないが、社会的、経済的な要因がより重要であることは間違いない。いまチマルテナンゴの方言がカクチケル語の代表となりつつあるのは、県都であることも大きな力であるが、それ上に新聞や雑誌などが他を圧して多く出版されているからである。

④創造性 グアテマラでは、法律をそれぞれの言語で書けという運動が1980年代の終わりぐらいからさかんになったが、結局法律化されなかった。グアテマラにある21の言語で、法律を書くとなると、ひじょうにコスト高になる。コストに見合った成果を考えると、とてもそんなことをするより、全員にスペイン語の読み書きを教えるほうがよいということになる。経済性の問題であるが、新しい運動が生まれている。新しい語彙の創出運動である。スペイン語からのたくさんの借用語があるが、それらをマヤの言葉に置き換えて、言語の純粋性を保とうとする運動が盛んになっている。商売や法律用語などで、これまでスペイン語が何の疑問もなく使われてきたが、それらのことばを自分たちのことばに置き換える運動が盛んになっている。いくつかの大学で、法律家に現地の言葉を教えているということが、今行なわれている。そうした語彙を掲載した本がいくつか出版されている (Comunidad Lingüística Kaqchikel 1999)。しかし数人の言語学者による討議の末創出した新語が民衆に受け入れられるかといえば、その可能性は少ないといわざるを得ない。よく流通しており簡便なスペイン語の借用で済ませるのがふつうである。そこを超えて、たとえば文学作品が生まれて、それでその言語を学びたくなるようになれば、素晴らしいのであるが、そこに行くことができるかということ、大変疑問に思われる。

⑤永続性 一つの正書法を学んだとして、それをどういうふうに表示していくか。ここから孫に伝えていく制度ができるかということ、とてもそういうことは叶いそうにない。特に、何のために何を書きたいのかということになってくると、ほとんど書き表わすことが、今のところない。あったとしても、ローカルな話で終わってしまい、とても国全

体で共有することにはなりそうもない。国を超えて広がるスペイン語に比べれば、伝えるという機能の差はとて大きい。そういうところで、なぜ書き方を教える必要があるかという点、ただ単に母語にもスペイン語と同じ様な地位を与えたいという願い以外にはないのではなかろうか。辞書をこしらえて、では誰が利用するのか。結局利用するのは、言語学者が利用するだけであって、現地の人々にとっては、ほとんど役に立たない。役に立つためには、たとえば、商売ができるとか、裁判に都合がいいとか、論争に勝つとか、そういうことになるであろうが、支配言語と対等の地位を得るためには、それなりの政治的な力を持つ必要がある。

これまでは政治的に力を持つようになったインディヘナは、支配者側の言語を使い、インディヘナの言語を棄てるのが一般であった。帰属する意識の変化が使用言語の乗り換えを伴った。一つにはこの言語の乗り換えをしなくなると、言い換えれば、二言語併用が当たり前になると、インディヘナの言語が残る可能性は高くなる。これはひとえに意識の問題である。幸いなことにスペイン語を学んで支配者側についてきた人々が、自分たちの言語や文化を棄ててなくなった。これが最近の目立った特徴といってよい。

さらに民族覚醒運動の影響が、マヤのことばが話せない人々でも、自分をマヤ人と認める人がふえてきた。これまでマヤの言語を話すか話さないかは、インディヘナとラディーノを分かち大きな指標であった。インディヘナであるかないかの指標であった民族衣装がどんどん減っていく中、最後に残った指標であった。しかしその指標さえ有効でなくなる社会となりつつある。

さらにはアワカテコ語の例であるが、子どもたちにアワカテコ語による表現、書き方大会をアカデミア・マヤが毎年催している。言語の復興、再認識に役立つような企画である。しかし見方を変えると、日常活発に用いられ、そうした企てさえ必要ないケクチ語などと比べると、言語の衰退が目に見えて明らかな現状をしめす証拠の一つといえるかもしれない。

グアテマラが、国語として、スペイン語を棄てて、マヤのことば一つに統一された社会にはなり得ない。インディヘナにとって解決策は二言語併用である。そのことにほとんどすべての人はすでに気が付いている。民族覚醒運動は、歴史的にみても、何度かあった。ときの政府により、先住民であることが不利になると、運動は急速に衰退せざるを得ない。そうしたことがたびたびあった。そういう政治的な力を超えた民族運動として二言語併用が当たり前の社会になるためには、スペイン語の圧倒的な力に負けない相当の自覚がなければいけない。

ラディーノ（メスティソ）とインディヘナの社会、言い換えれば、スペイン語を使う人々と、インディヘナの言語を使う人々との間の差は、ひじょうに大きい。両者の間の不信感は日常生活の至るところで観察できる。両者の間の文化交流（intercultural）と

二言語併用 (bilingüe) という試みが、いま大きな社会運動として始まっている。社会の流動性、解放性が進んでいる現在、その運動の永続性こそ、言語の消滅を防ぐ唯一の方法である。しかしその舵取りを間違えるとスペイン語に飲み込まれてしまう。いまはまだその危険性の方が大きい。

表1 中米諸語の系統と話者数

語族, 語派, 語群, 方言	位置	話者数
I. 南ユートアステカ語派 Southern Uto-Aztecan (Sonoran)		
A. テピマ語群 Tepiman (Pimic)		
1. ピマン Piman		
ピマアルト Pima Alto	[1]	10,000
パパゴ Papago	[2]	15,000
ピマバホ Pima Bajo (Nevome, Ure, Yecora)	[3]	2,000?
2. テペワン Tepehuan (Odami/Odame)		5,600/17,900/18,470
北テペワン Northern Tepehuan	[4]	
南テペワン Southern Tepehuan	[5]	
*テペカノ Tepecano	D1	0
B. タラカイタ語群 Taracaitan (Taracahitic)		
1. タラウマラン Tarahumaran		
タラウマラ Tarahumara (Raráuri)	[6]	25,500/62,500/54,430
グァリヒオ Guarijío (Varahío)	[7]	3,000?
2. オバタン Opatan		
*オバタ Opatá (Teguima)	D2	#12
*ホバ Jova	D3	0
*エウデベ Eudeve (Heve, Dohema)	D4	0
3. カイタン Cahitan		
ヤキ Yaqui (Cahita)	[8]	7,100/9,300/10,990
マヨ Mayo (Cahita)	[9]	27,900/56,400/37,410
4. *トゥバル Tubar		
	D5	0
C. コラ Chol 語群 Corachol		
コラ Cora	[10]	6,300/12,300/11,920
ウイ Chol Huichol	[11]	6,900/51,900/19,360
D. ナワ語群 Nahuatl		
1. アステカ Azteca (General Aztec)		
ナワトル Nahuatl	[12]	800,000/1,377,000/1,197,330
ナワル Nahual	[13]	
ナワット Nahuat	[14]	
ピピル Pipil	[15]	2,000? ~ 200
2. *ポチュテコ Pochuteco	D6	0
II. *クイトラテコ Cuitlateco	D7	0
III. ユーマ語族 Yuman (includes only Yuman languages of Mexico)		
パイパイ Paipai	[16]	220
コチミ Cochimi (Kumyai, Kimiai)	[17]	160
キリワ Kiliwa	[18]	40
ココパ Cocopa (Cucapa)	[19]	140
IV. セリ Seri	[20]	500/500/560
V. タラスコ Tarasco (Purepecha)	[21]	60,500/118,700/94,840
VI. トトナカ語族 Totonacan		
トトナコ Totonaco	[22]	124,900/196,100/207,880
テペワ Tepehua	[23]	5,600/8,500/8,700

表1 続き

語族, 語派, 語群, 方言	位置	話者数
VII. オトマング語族 Otomanguean		
A. チチメコ Chichimeco (Meco, Jonaz)	[24]	?/1,000?/1,640
B. オトパメ語群 Oto-Pamean		
1. パメアン Pamean	[25]	5,000/57,00/5,730
北パメ North Pame		
中央パメ Central Pame		
南パメ South Pame		
2. マトラツインカン Matlatzincan		
マトラツインカ Matlatzinca (Pirinda)	[26]	?/18,00/1,450
オクィルテコ Ocuilteco (Tlahuica)	[27]	?/400/760
3. オトミアン Otomian		
a. オトミ Otomí	[28]	221,100/306,200/280,240
北西オトミ Northwestern Otomí (Mesquital)		
北東オトミ Northeastern Otomí (Sierra)		
南西オトミ Southwestern Otomí		
イシュテンコ・オトミ Ixtenco Otomí		
b. マサワ Mazahua	[29]	104,800/194,200/127,830
C. スパネク語群 Supanec		
1. トラパネコ Tlapaneco (Yope)	[30]	30,900/55,100/68,480
2. *サブティアバ Subtiaba	D8	0
(*マリビオ Maribio El Salvador)		
D. ポボロカ語群 Popolocan		
1. チョチョ小語群 Chochoan		
a. イシュカテコ Ixcateco	[31]	?/200?/1,220
b. チョチョアン Chochoan		
ポボロカ Popoloca	[32]	?/6,800/1,730
チョチョ Chocho	[33]	1,000?/12,400/12,550
2. マサテコ Mazateco	[34]	101,600/124,200/168,370
E. アムスゴ Amuzgo	[35]	13,900/18,700/28,290
F. ミシュテカ語群 Mixtecan		
1. ミシュテカ小語群 Mixtecan		
ミシュテコ Mixteco	[36]	233,300/323,200/386,870
クイカテコ Cuicateco	[37]	10,200/14,200/12,680
2. トゥリケ Trique	[38]	8,000/8,500/14,980
G. サポテカ語群 Zapotecan		
1. サポテコ Zapoteco	[39]	283,400/423,000/403,460
(*パバブコ Papabuco #20)		
2. チャティーン Chatino	[40]	11,800/20,600/28,990
H. チナンテコ Chinanteco	[41]	54,200/77,100/109,100
I. マング語群 Manguean (Chorotegan, Chiapanec-Mangue)		
1. *チアパネコ Chiapaneco	D9	#180
2. *マング Mangue	D10	0
(*ディリア Diria Nicaragua)		
(*チョロテガ Chorotega Honduras)		
(*ニコヤ Nicoya Costa Rica)		
VIII. ワベ Huave	[42]	75,00/10,000/11,960
IX. オアハカチョンタル Oaxaca Chontal (Tequistlatec)	[43]	10,300/81,000/ 4,670
低地チョンタル Lowland Chontal (Huamelultec)		
高地チョンタル Highland Chontal (Tequistlatec)		

表1 続き

語族, 語派, 語群, 方言	位置	話者数
X. ミヘソケアン Mixe-Zoque (Zoquean, Mixean)		
1. ソケ語群 Zoquean	[44]	272,00/31,000/43,160
a. チアバスソケ Chiapas Zoque		
b. オアハカソケ Oaxaca Zoque (San Miguel Chimalapa, Santa Maria Chimalapa)		
c. タバスコソケ Tabasco Zoque (Ayapa)		
d. ベラクルスソケ Veracruz Zoque (Zoque Popoluca)	[45]	
シエラポボルカ Sierra Popoluca (Soteapan etc.)		18,700/23,800/ 29,030
テシステペクポボルカ Texistepec Popoluca		170
2. ミヘ語群 Mixean		
a. ベラクルスミヘ Veracruz Mixe (Mixe Popoluca)	[46]	
サユーラポボルカ Sayula Popoluca		
オルータポボルカ Oluta Popoluca		3
b. ミヘ Mixe	[47]	54,500/74,100/ 95,260
東ミヘ Eastern Mixe		
西ミヘ Western Mixe		
c. *タパチュルテク Tapachultec	D11	0
XI. マヤ語族 Mayan		
A. ワステカ語群 Huastecan		
1. ワステコ Huasteco	[48]	66,100/103,800/120,740
2. チコムセルテコ*Chicomuceltec	D12	#20
B. 北低地語群 Northern Lowland Maya		
1. ユカテカ小語群 Yucatecan		
a. ユカテコ Yucateco	[49]	454,700/665,400/713,520
b. ラカンドン Lacandon	[50]	?/300/100
c. イツァ Itzaj[Itza]	[51]	650/3,000/1,835
d. モパン Mopan[Mopan]	[52]	8,500/5,000/13,460
C. 南低地語群 Southern Lowland Maya		
1. チョル小語群 Cholan		
a. チョル Chol	[53]	73,300/96,800/ 128,240
b. チョントル Chontal	[54]	20,000/29,000/30,140
c. チョルティ Ch'orti' [Chorti]	[55]	27,097/52,000/76,782
d. *チョルティ*Cholti	D13	0
2. ツェルタル小語群 Tzeltalan		
a. ツォツィル Tzotzil	[56]	95,400/133,400/229,200
b. ツェルタル Tzeltal	[57]	99,500/215,200/261,080
c. トホラバル Tojolabal (Chaneabal)	[58]	35,000/22,400/36,010
D. 西高地語群 Western Highland Maya		
1. カンホバル小語群 Kanjobalan		
a. チュフ Chuj[Chuj]	[59]	50,000/29,000/87,489
b. ハカルテコ Jakalteko/Popti' [Jacalteco]	[60]	39,635/32,000/86,266
カンホバル Q'anjob'al[Kanjobal]	[61]	75,155/112,000/211,687
アカテコ Akateko[Acateco]	[62]	40,991/20,000/40,991
c. モトシントレコ Motocintleco (Mocho)	[63]	600
トゥサンテコ Tuzanteco	[64]	?
2. マム小語群 Mamean		
a. テクティテコ Tektitico (Teko) [Tectitico/Teco]	[65]	?/2,500/4,895
マム Mam[Mam]	[66]	346,548/686,000/1,126,959
b. アワカテコ Awakateko[Aguacateco]	[67]	18,572/16,000/35,485
3. イシル Ixil[Ixil]	[68]	47,902/71,000/134,599

表1 続き

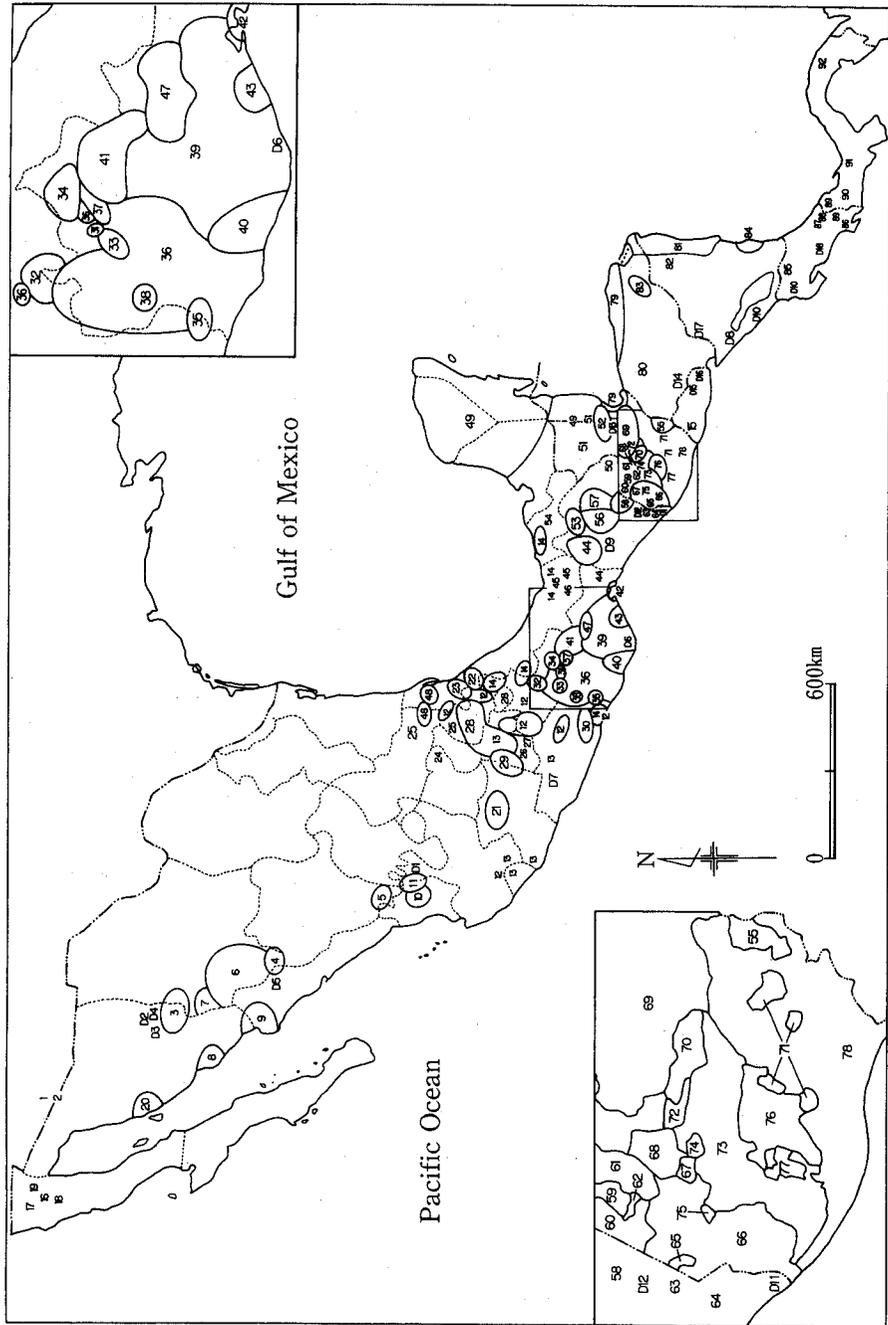
語族, 語派, 語群, 方言	位置	話者数
E. 東高地語群 Eastern Highland Maya		
1. ケクチ Q'eqchi' [Kekchi]	[69]	473,749/361,000/732,340
2. ポコム小語群 Pocom		
a. ポコムチ Poqomchi' [Pocomchi']	[70]	94,714/50,000/266,750
b. ポコムム Poqomam [Pocomam]	[71]	46,515/32,000/130,928
3. キチュ小語群 Quichean		
a. ウспанテコ Uspanteko [Uspantec]	[72]	12,402/2,000/22,025
b. キチュ K'iche' [Quiche]	[73]	647,624/925,000/1,896,007
サカプルテコ Sakapulteko [Sacapulteco]	[74]	3,033/21,000/43,439
シバカベニヨ Sipakapeño [Sipacapa]	[75]	4,409/3,000/6,118
カクチケル Kaqchikel [Cakchiquel]	[76]	343,038/405,000/1,032,128
ツトゥヒル Tz'utujil [Tzutujil]	[77]	50,080/80,000/160,907
XII. シンカ Xinca	[78]	100?
XIII. アrawカ語族 Arawakan (includes only a Central American language.)		
ガリフナ Garífuna (Black Carib)	[79]	70,000
XIV. レンカ語族 Lenca		
レンカ Lenca (Honduran Lenca)	D14	0
チランガ Chilanga (Salvadoran Lenca)	D15	0
XV. トル Tol (Jicaque)	[80]	300
XVI. ミスマルバ語族 Misumalpan (Misuluan)		
A. ミスキトゥ Miskitu	[81]	67,000
B. スム Sumu (Ulwa=Southern Sumu)	[82]	4,900
Bawihka, Tawahka, Kukra, Panamaka		
C. マタガルバ小語群 Matagalpan		
*カカオペラ Cacaopera	D16	0
*マタガルバ Matagalpa	D17	0
XVII. チブチャ語族 Chibchan (includes only Central American Chibchan languages.)		
A. パヤ Paya (Pech)	[83]	300
B. ラマ Rama	[84]	650
C. グアトゥソ Guatuso (Malecu)	[85]	300
D. ボルカ Boruca (Brunca)	[86]	5
E. *ウエタル Huetar (Guetar)	D18	0
F. ビセイタ Viceita		
カベカル Cabécar (Chiripó, Estrella)	[87]	6,000
ブリブリ Bribri	[88]	5,000
G. テリベ Teribe/Térraba	[89]	1,100
H. グアイミ Guaymí	[90]	56,500
I. ボコタ Bocotá	[91]	15,000?
J. クナ Cuna	[92]	36,500

メキシコのマヤ諸語の人口は1970/1980/1990の国勢調査による。

チコムセルテコ語は消滅したが、チコムセルテコと自称する人が約20人いる。

グアテマラのマヤ諸語の人口は、次の1/2/3の文献による。

1. Oficialización de los idiomas indígenas de Guatemala (Proyecto Q'anil B:1999) pp. 36-40. Censo poblacional 1994 para el número de hablantes del idioma K'iche', Q'eqchi', Kaqchikely Mam. Censo poblacional 1981 para los demás idiomas.
2. Estrategias para la alfabetización de la población indígena de Guatemala (ILV: 1982)
3. Análisis de situación de la educación maya en Guatemala (Cholsamaj: 1996) p. 55.



地図 中米語の分布

	a	e	i	o	u
p					
p'					
s					
l					
l'					
lz					
lz'					
w					
x					
y					

	a	e	i	o	u
'					
b					
ch					
ch'					
h					
k					
k'					
l					
m					
n					

表2

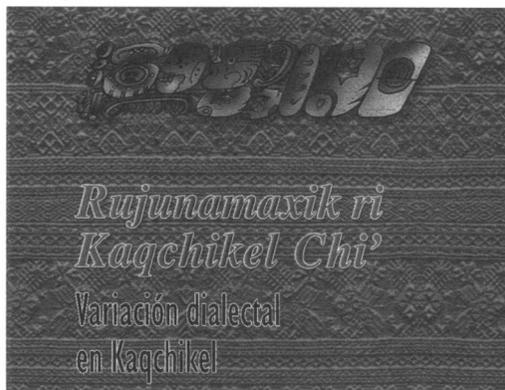
参 考 資 料



カンホバル語 q'anjobal
sk'exkixhtaquil yallay koq'anej
sa-k'e xi-ki xi-ki ta-li-ya-li la yi-ko k'a-ne-je
(マヤ文字表記の音転写)



キチエ語の例
Ujunamaxiik ri K'ichee' ch'ab'al
u-ju-na ma-xi-ka li k'i-che-e ch'a-b'a-la
(マヤ文字表記の音転写)



カクチケル語の例
rujunamaxik ri kaqchikel chi'
u-ju-na-ma-xi-ka ka-ka-chi-ke-le chi-i
(マヤ文字表記の音転写)

注

1) インディヘナ言語を扱っている主な機関

Mexico :

Instituto Nacional de Antropología e Historia
 Insitituto Indigenista
 Universidad Nacional Autónoma de México
 Instituto Lingüístico de Verano

Guatemala :

Proyecto Lingüístico de Francisco Marroquín
 Universidad Rafael Landívar, Programa para el Desarrollo Integral de la Población Maya (PRODIPMA)
 Oxlajuj Keej Mayab' Ahtz' ib' (OKMA)
 Academia de las Lenguas Mayas de Guatemala (ALMG)
 Instituto Lingüístico de Verano

Nicaragua :

Centro de Investigaciones y Documentación de la Costa Atlantica (CIDCA)

Costa Rica :

Programa de Investigación del Departamento de Lingüística de la Universidad de Costa Rica
 発刊雑誌 Estudios de Lingüística Chibcha Vol. I (1981) ~
 対象としている言語 Teribe, Terraba, Guatuso, Cabecar, Bribri, Boruca, Bocota, Huetar, Guaymi, Paya, Rama, Kuna, Ika, Kogi, Muisca.

文 献

Brinton, Daniel G.

1884 A grammar of the Cakchiquel language of Guatemala. *Proceedings of the American Philosophical Society* 21, 345-412.

Campbell, Lyle, and Martha C. Muntzel

1989 The structural consequences of language death. In Nancy C. Dorian (ed.) *Investigating obsolescence: Studies in language contraction and death*, pp.181-196. Cambridge: Cambridge University Press.

Comunidad Lingüística Kaqchikel (ed.)

1999 *Neologismos y palabras rescatadas: ambiente social*. Guatemala: Iximulew.

1999 *Neologismos y palabras rescatadas: matemática*. Guatemala: Iximulew.

1999 *Neologismos y palabras rescatadas: artes del idioma*. Guatemala: Iximulew.

1999 *Neologismos y palabras rescatadas: ambiente natural*. Guatemala: Iximulew.

- Contreras García, Irma
 1985 *Bibliografía sobre la castellanización de los grupos indígenas de la República Mexicana* (siglos XVI al XX). México: Universidad Nacional Autónoma de México.
- Craig, Colette
 1992 A Constitutional response to language endangerment: The case of Nicaragua. *Language* 68, 17-24.
- Denevan, William M. (ed.)
 1992 *The native population of the Americas in 1492*. 2nd Edition. University of Wisconsin Press.
- England, Nora C.
 1995 Linguistics and indigenous American languages: Mayan examples. *Journal of Latin American Anthropology* 1 (1), 122-149.
 1996 Maya Education: A historical and contemporary analysis of Mayan language education policy. In Edward F. Fischer and R. McKenna Brown (eds.) *Maya cultural activism in Guatemala*, pp.208-221. University of Texas Press.
 1998 Mayan efforts toward language preservation. In Lenore A. Grenoble, and Lindsay J. Whaley (eds.) *Endangered languages: Language loss and community response*, pp.99-116. Cambridge: Cambridge University Press.
- Garza Cuarón, Beatriz, and Yolanda Lastra
 1991 Endangered languages in Mexico. In Robert H. Robins, and Eugenius M. Uhlenbeck (eds.) *Endangered languages*, pp.93-134. Oxford/New York: BERG.
- Kaufman, Terrence
 1976 *Proyecto de alfabetos y ortografías para escribir las lenguas mayances*. Guatemala: Proyecto Lingüístico Francisco Marroquín.
 2001 Two highly effective models for large-scale documentation of endangered languages. In *Lectures on endangered languages 2*, pp.269-284.
- Ligorred, Francesc
 1992 *Lenguas indígenas de México y Centroamérica*. Madrid: Mapfre.
- Manrique, Leonardo, Yolanda Lastra, and Doris Bartholomew (Coodinadores)
 1994 *Panorama de los estudios de las lenguas indígenas de México*. 2 vols. Quito: Abya-Yala.
- McQuown, Norman A.
 1955 The indigenous languages of Latin America. *American Anthropologist* 57, 501-570.
 リゴベルタ・メンチュウ (高橋早代訳)
 1987 『わたしの名はリゴベルタ・メンチュウ——マヤ＝キチェ族インディオ女性の記録』東京：新潮社。
- Sandoval Aguilar, Zazil
 1991 *Catálogo de manuscritos e impresos en lenguas indígenas de México, de la Biblioteca Nacional de Antropología e Historia (México, D. F.)*. México: INI-CIESAS.
- Thornton, Russell
 1987 *American Indian holocaust and survival: A population history since 1492*. University of Oklahoma Press.

Yasugi, Yoshiho

1985 「ユカテクマヤ語の正書法の歴史——マヤ人の文字使用との関連において」『国立民族学博物館研究報告』10（1）, 93-110。

1995 *Native Middle American languages: An areal-typological perspective*. Senri Ethnological Studies 39. Osaka: National Museum of Ethnology.

